

自分の中に生まれた「問い」から、 未来を創造し「共創する力」とは？

Co-Innovation University / 共創学部

内発的な「問い」こそが、 地域の未来を変える出発点

遡ること12年前。京都大学で自然エネルギーと地域金融の研究をしていた井上氏はドイツである光景に出会う。それは地元のエネ業者が自ら発電所を立ち上げ、自然資源を活用することで経済的に自立している姿。一方で頭をよぎったのは、故郷・飛騨高山の主要産業である観光業に従事する人々がオーバーツーリズムなどの対応に追われ疲弊している姿。日々を回すことで精一杯で、未来について考える時間を持つこともままならない。そんな体験がもたらした、「ドイツのような地域経営・地方自治のしくみを実現することができたなら、地域の人々がもっとワクワクしながら自分の人生を生きられる

のではないか？」という井上氏の内発的な問いこそが、CoIUの出発点。学生自身の視点から生まれる「問い」を元に、地域とともに日本の未来を創る力を育てる「学びの場をつくりたい」という想いに結びついたという。「ドイツには地域の魅力や課題を自ら研究し、意思を持って行動することで年収数千万円を稼ぐ方がいます。一方、高山市には豊かな山林資源があるのに十分活用がされておらず、GDPも面積がほぼ同じ東京都は約93兆円（2013年）あるのに対し、約3000億円（2010年）しかありませんでした。そんな歪な状況を覆すために必要なのは、今ある前提、現在の産業構造を問い直し、地域を本来あるべき姿に導くこと。各地域に潜む魅力を掘り起こして新たな価値をつくる、

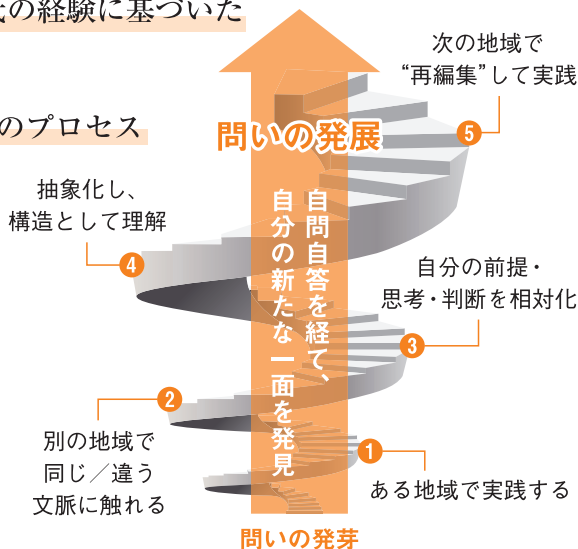
産業構造を転換するプロセスの中にこそ未来があり、そのイノベーションを牽引する存在として大学が果たす役割は大きいと考えました。たとえばGAF Aといった世界的IT企業が生まれる土壌をつくり上げたのは、シリコンバレーのスタンフォード大学。地域密着型の大学だったので「理論・対話・実践」の往還。内発的な問いとは「身体を動かさず↓理論を学ぶ↓異なる文脈に触れ、思考を相対化・構造化する↓自分のやりたいうことを見つける↓身体を動かす」のサイクルから生まれるものであり、自分が思う、地域のありべき形を実現する推進力となるもの。CoIUでボンディングシップと呼ばれる「問い起点のプロジェクト型学習」もまた、井上氏の体験と深く結びついている。

理事長・井上氏の経験に基づいた

CoIUにおける 「問いの発展」のプロセス



学校法人CoIU 理事長
井上 博成
Hironari Inoue



2026年4月、岐阜県飛騨市に開学するCoIU（コーアイユ）。学生の視点から生まれる「内発的な問い」を起点とした学びを通して、自身と社会の未来を変える力を育てる「共創」とは？ 発起人であり理事長の井上氏に話を伺った。

取材・文／ミューズ・コミュニティー

● 教室を飛び出し、日本中の地域をフィールドにできる新しい大学。北海道から九州まで、全国にサテライトキャンパスを設置予定

ボンディング
シップ

ボンディングシップとは？

「Bond」=地域との絆 × 超実践型「Internship」

大学2年次の1年間、週3日間程度、各地域の企業や自治体等の一員として、「理論」を学びながら「対話」を重ね「実践」的に課題解決や事業発展に貢献するプロジェクトに取り組む。

ボンディングシップの段階的なSTEP

STEP 1 地域企業や団体を知る・体験

複数の企業や団体での仕事体験や調査を通じて、地域の“今”に触れながら、自分の興味や問いを見つけていきます。

STEP 2 地域の課題解決に向けてプロジェクトを試行錯誤する

関心を持った企業や団体を選び、地域の人々や多様なプレイヤーと協働しながら、課題解決に向けたプロジェクトに挑戦します。

サテライトキャンパス予定地

- 北海道
- 新潟県胎内市
- 長野県小布施町
- 石川県中能登地区
- 宮城県仙台市
- 岐阜県岐阜市
- 愛知県田原市
- 富山県射水市
- 岐阜県飛騨市・高山市
- 三重県
- 京都府京都市
- 鳥取県鳥取市
- 福岡県福岡市

※1期生については候補地より7~8拠点が整備予定。
※変更する可能性があります。



「森林面積が90%以上を占める高山市の産業構造転換のモデル事業として、地域協業型の小水力発電事業に挑戦しました。地域で新しいことをやるには、住民の方との対話、合意形成が重要です。高山市のプロジェクトでは『維持管理を一緒にやりませんか？ 運営会社の役員になりませんか？』とご提案し、地域の方が主体者として小水力発電事業に継続的に関わられる仕組みを構築しました。小水力発電によって収入や雇用という経済的なメリットが得られ、自身が暮らすコミュニティへの帰属意識も増していくという構造です。小水力発電事業は現在、国内数百カ所が開発が進み、投資額も大きくなってきました。年間の売上もまとまった金額が見込めるようになり、融資の返済後は地域に継続的に利益をもたらす続けてくれます。山という見捨てられてきた資源が、それだけの付加価値を生むのです。利益が緩やかに担保された状態を二つひとつ積み上げていくことが、地域の産業構造が変わるほどの大きなインパクトになり、収益性のある産業でコミュニティを強くしていくことが、資本主義の中で地域という存在が守られる社会につながるのです。全国の小水力発電事業を通して、私はそれを実証したいと思います」。

Information

Co-Innovation University



「理論・対話・実践」を連動させた学びから、課題設定に必要な「問いを立てる力」、他者と協働して課題解決する「共創する力」を養う「共創学部／地域共創学科」を擁する2026年4月新設の四年制大学。岐阜県飛騨市の「まちなかキャンパス」、全国各地に設置予定の「サテライトキャンパス」を拠点に、企業・自治体・教員・社会人とも交わりながら長期実践型インターンシップに取り組み、地域社会の課題発見～解決に挑戦できる。

● DATA

〒509-4225 岐阜県飛騨市古川町金森町11-15
TEL 0577-73-5252 (代表)
URL <https://coiu.jp>

「理論対話・実践」の往還から 自分のあるべき姿を見つける

CoIUという場を通して、共に(Co)新しい価値(Innovation)を創り出せる仲間を増やしていきたいと語る井上氏。決められた答えのない自由な学びは学歴や偏差値といった「他者との比較による評価」とは「問いを画すものであり、自分だけの「問い」を見つけ、実際の挑戦へと発展させていく過程に意義があるという。「CoIUの教育は「個」にフォーカスするものでありたいと考えています。問いを立てたり開いたりしながら人と関わり合い、なりたいた自分を輪郭化していく。それにはメタ認知、自身を客観的に見つめる作業が必要となり、それを繰り返し返す中で「私ってこういう面もあったんだ」という気づきが生まれる。そういった機会の提供こそが、教育機関が担う重要な部分だと思っております」。農業、林業、漁業、デジタル、福祉、医療、食・健康、社会基盤、防災、法と社会、アートなど、CoIUが扱うテーマは多岐にわたります。すべてが地域の産業構造を変えられる可能性を秘めたもの。開学前から様々な企業が賛同・連携を表明していることから期待の高さが伺える。問いを立て、考え、行動する。この往還の中で自分の未来、社会の未来を動かしていく、CoIUの新しい学びに引き続き注目していきたい。

PR